

ガザでの新たな活動

聴覚障がいの 早期発見・早期支援

当会では3月からアトファルナろう学校と一緒にガザの乳幼児の聴覚検査と早期支援事業を開始しました。聴覚検査の専門家やソーシャルワーカーが各地域の診療所や幼稚園などで乳幼児に聴覚検査を実施しています。問題が見つかった場合には脳波測定で聴覚障がいの有無を確認します。そして聴覚障がいがあると分かった子どもと家族に対してサポートを提供するプログラムです。

乳幼児健診制度が確立していないガザでは「この子は名前を呼んでも反応しない」と悩みながら子育てを続け、ある程度大きくなってから聴覚に問題があることが発覚したり、学校についていけなくなってアトファルナろう学校に相談に来たりということが多々あります。早いうちに聴覚障がいの有無を確認し、適切なケアと支援を提供していくことが必要です。乳幼児期は情緒的・社会的な発達や発育、学齢期以降の学力形成などに大きな影響が出る重要な時期だからです。早い時期に適切な教育支援を受けることは、将来的な子どもの社会的・経済的自立につながります。また、他の発達障がいが発見されることもあります。

診療所では予防接種を受けた直後の子どももいて、検査機器を耳に入れようとするだけで泣き叫んでしまうこともあります。幼児には検査技師が耳に装着する部分に触らせて、痛くないことを確認させて自分で耳に装着するのを促したり、「ここから鳥の声が聞こえるんだよ」と言って落ち着かせたりします。検査器具からは空気の振動が出ますが、その振動が不思議なのか検査器を耳に装着してから目を見開いたり、表情を変えたり、おもしろくて笑ったり、少し怖いのか泣きそうになる子どもなど様々でした。「猫の声の方がいい!」という子どももいます。中耳炎がある子では検査結果が正しく出てこな

えたり、おもしろくて笑ったり、少し怖いのか泣きそうになる子どもなど様々でした。「猫の声の方がいい!」という子どももいます。中耳炎がある子では検査結果が正しく出てこな



い場合があり、耳鼻科に紹介し中耳炎を治療してから再度検査します。

◆家族を安心させながら

聴覚障がい確定した場合、その検査結果は家族に慎重に伝えられます。「子どもに聴覚障がいがあるという結果を知ってこの世の終わりと絶望してしまう家族



もいますが、決してそうではないこと、どういう教育やサービスが受けられるかを伝えていきます。親が取り乱したり、泣いたり、自分を責めることもあり、そういう精神面の状況も見極めながら話します。受容するまでが最も重要で難しい期間です。結果を伝えた後、アトファルナろう学校の中を案内して、幼稚園や学校、職業訓練、手話教室や各種活動について紹介したり、実際に通っている子どもや家族の話を知ったりすることで、家族の表情が和らいていくと私もほっとします。」とソーシャルワーカーは話します。

今後1年をかけて地域での聴覚検査を進め、最終的には5000人の子どもたちの検査を目指します。また、聴覚障がいがあると分かった乳幼児とその家族に対しての支援、補聴器の提供、手話講座、コミュニティのための啓発活動、ガザおよびパレスチナでの障がい児支援のガイドライン作りを実施していく予定です。

